

流星のロックマン Arrange The Original 2.5 ~ツカサ外伝~

悲傷

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼はどこにでもいる少年だった。違うところがあるとするなら、親に捨てられたことと、その恨みから二つ目の人格を生み出してしまったことぐらいだろう。

そんな彼に訪れる人生の試練。強いられ、悩み、苦悩し……生み出される暴走と新たな物語。

この先に、少年は何を見るのだろうか……。

○大人気ゲーム、流星のロックマン2と3の間にあたるオリジナルストーリーです。

タイトル通り、ツカサくんが主人公です。
スバルとツカサの物語をご堪能ください。

【お願い】

- ・今後の展開やネタバレに関する質問はお控えください
- ・リクエストは一切受け付けておりません

2020年9月23日

流星のロックマン作品内で、平均評価ランキング1位になれました。

応援、感想、評価をありがとうございます／(^▽^)／

目次

第1話	僕と君	1
第2話	無力な僕	8
第3話	僕の望み	16
第4話	君なんて	21
第5話	僕は…	29
第6話	僕にできること	37
第7話	僕のヒーロー	44
最終話	僕と君と	51

第1話・僕と君

お願いだ。もうやめてくれ……

何度そう願ったことだろう。何度そう頼んだことだろう。

絞り出した声は罵声に飲まれて、誰にも届くことなくかき消える。続いて頬を打つ痛み。地面に手をつくとき、背中に鈍い痛みが走る。蹴られたのだ。

お願いだから……やめてくれ……

痛い。痛い痛い痛い……

頬が痛い。背中が痛い。でもそれよりも……胸が痛い。こいつらの……自分よりも一回り年上の子供たち。体が大きいのを良い事に、弱い者虐めをするくだらない連中。その口から放たれる言葉が……抉ってくる。少年を深く傷つける。

親無し

捨てられた

いない存在

痛いよ……痛い……痛い痛い痛い痛い痛い

やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて

お願いだから、もうやめて……。懇願すれば、髪を引っ張られた。

お願いだから……もうこれ以上、追い詰めないで。出てきてしまおう。あいつがやってくる。

ここにいてはいけない。逃げようとする。また髪を引っ張られた。女みたいだと笑われながら。ダメだ。いけない。そう、少年はここにいてはいけないのだ。ここにいたら……危ない。危険だ。この子たちが……危ない。

なんとか振り払おうとする。ガツンと音が鳴る。後頭部……意識が……遠く……

気づいたとき、少年は立っていた。次に飛び込んできた光景は、倒れている子供たち……。さっきまで少年を虐めていた者たちだ。

ああ……と声を漏らした。また……。また……。やってしまった

……。手が震えてくる。そこにある感触を理解しながら、それが夢であつてほしいと願いながら、ゆつくりと持ち上げる。ある。確かにある。感触が残っている。確信する。これをやったのは……。あいつだ……。また、あいつがやったのだ。

ふと前を見ると、あいつがいた。

少年を馬鹿にする同級生を、あいつが殴る。

少年に突つかかってくる上級生を、あいつが殴る。

少年に説教と言う名の悪口を言う大人を、あいつが殴る。

止まらない。あいつは止まらない。

止められない。少年はあいつを止められない。

あいつの姿が変わる。黒い体つきで……。額には一本の角。右腕側だけに取り付けられた装甲。笑っている。あいつが笑っている。高らかに……。声を上げて。

やめて……。くれ

声を上げる。虫の様な声で……。あいつが振り返る。口角を上げて、左手である場所を指さす。そちらを見る。一人の男の子がいた。赤い服を着ていて、何より目立つ癖毛に、額にかけた緑色のサングラス。胸元には流星型のペンダント。

首を振る。ダメだ。彼だけは……。彼だけは……。

そして少年は気づいた。自分の姿に。白い体つき……。額には一本の角。左手側だけに取り付けられた装甲……。

ああ……。自分は……。自分は……。

違う……。違う違う違う違う違う違う違う違う違う

「ツカサくん？」

ハッと目を覚ました。

目の前に男の子がいた。癖毛に、額にのせた緑色のサングラス。赤い服に、胸元にはペンダント。

「……スバルくん？」

ツカサはゆつくりと首を横に振った。

「……ハッハッ。」

「おいおい、立ったまま寝てたのか？」

スバルと呼ばれた少年のポケットから、低い声がした。スバルが取り出したのは携帯端末だった。その液晶には青い体をした獣の様な生命体がいた。獣と違う点を上げるとしたら、緑色の炎を思わせる背中の鬣と、鋭い爪を携えた腕があり、足がないことだろう。

「いや……違うよ。考え事をしてたんだ」

ツカサは大きく息を吐くと、潮の香りを感じた。聞こえてくる波の音。照りつける太陽光に、混じってくる黄色い声。

「あ、そっか……海に来てたんだよね」

視線の先には友人たち……ルナ、ゴン太、キザマロ、ミソラがいる。

「ねえ、やっぱり寝ぼけてる？」

「そうかもね」

何をしているのだろう、自分は。大切な友達と一緒に海に来ているというのに、こうして海岸に突っ立っているというのに、それを忘れていたなどと。

「それより、早く水着に着替えようよ。ゴン太とキザマロが待ってるよ。するんでしょ、パンツ破り」

「……………うん」

たつぷりと二秒ほど間を置いてツカサは頷いた。

「ずつと気になってたんだよね。男にのみ許された禁断の必殺技なんでしょ。どんなのなんだろう？」

笑えない。こればかりは笑えない。パンツ破り……それが鬼畜の所業であることを知らず、純粹な目をしているスバル。この後、彼がどんな顔をするのか……微妙な顔でごまかすしかなかった。

スバルは一足先に駆け出していく。ゴン太とキザマロが手を振ってくる。ルナとミソラも手招きする。

一歩足を踏み出す。少しだけ踏みとどまると、彼は駆けだした。

◇

「パンツ破りがあんなものだったなんて……」

ツカサの隣では、スバルが疲れた顔で肩を落とした。夕日をもたらす線状の光と合わさって、どこか痛々しい。ツカサは苦笑いをするし

かない。

「無事でよかったね、パンツ」

「うん……母さんに謝ることにならなくて良かったよ……ゴン太はアウトだったけれど……」

「あれね」

「うん、あれ」

ブツンという盛大な音と、その時のゴン太の顔を思い出して「プクク……」と二人は吹き出した。笑っちゃ悪いとは分かっているが、これを我慢するのは無理というものだ。ちなみに、スバルのスターキャリアーはガタガタと震えている。ウオーロックが大爆笑しているのだ。

そんな二人の笑い声もすぐに小さくなっていく。分かっているのだ、二人とも。

「もうすぐ、行っちゃうんだよね……」

「……うん」

ツカサは小さく頷いた。もうすぐ波乱の連続だった夏休みが終わる。ツカサ達が通うコダマ小学校にも新学期が訪れる。生徒会長選挙が始まるので、ルナはゴン太とキザマロをこき使うだろうし、スバルもつき合わされるだろう。忙しいだろうが、そこにはやりがいと青春があるはずだ。

ただその中にツカサは加われない。転校するからだ。

「やっぱり、どうにもならないよね」

「……仕方ないんだ。孤児院側にも都合があるから」

ツカサは孤児院である。世話になっている孤児院の都合により、ツカサは別の施設に移動することになっている。どんなやり取りや打ち合わせがあったのかは分からないが、知ったところで子供が関与できる話ではない。

これが最後ののだ。ツカサが皆と作った、最後の思い出だ。

「……スバルくん。また、会えるかな？」

「会えるよ。っていうか、会おうよ」

「……うん」

ツカサとスバルの暗い雰囲気を感じたのだろうか。ツカサのス

ターキヤリアーからポンと何かが飛び出した。黄色い光の塊のよう
なやつで、中央より少し上の部分には白い仮面がついている。

「ジェミニ、大人しくして」

ツカサが柔らかく声をかけると、スツとジェミニは戻ってきた。

スバルのスターキヤリアーからもウォーロックが出てきて、ジェミニを訝しげな眼で見た。

「……今日も思ったが、随分と大人しくなったな」

「うん、このジェミニは前のジェミニとは違うけれどね。知能もだいぶ発達して来たみたい」

ウォーロックとジェミニは異星人だ。電波の体を持っている、正真正銘の地球外知的生命体だ。それぞれがAM星、FM星という惑星からやってきて、スバルとツカサのパートナーになった。

ジェミニはFM星王の片腕として地球破壊計画の中心を担った侵略者だ。ウォーロックはスバルの父、大吾との約束を守るために……そして自分の復讐の為にスバルに力を貸し、FM星人の侵略を防いだ。という過去がある。

当時のジェミニは冷徹非道で知恵も回る強敵だったのだが、今のジェミニからはそんな雰囲気は感じられない。ツカサの掌の上に乗る、どこか一点を凝視している仕草は幼い子供を連想させる。

「やっぱり、人格は別物なんだね？」

「うん、ゼロから再構築されているみたい」

以前のジェミニはこの世から消滅した。ここにいるジェミニは、ツカサの体内に残っていた残留電波から再構築された、文字通り生まれ変わった子供なのだろう。

スバルはジェミニをまじまじと見る。

「この様子だと、もう悪さをする事はなさそう……かな？」

「うん、どうだろうね……一緒にいる僕もさっぱり分からないよ。」

「少なくとも、僕の力は必要なさそうだね」

「え？」

スバルの言葉の意味がよく分かっていないようで、ツカサは首を傾げた。

「もしジェミニがまた悪い事したら、誰かが止めないといけないでしょ」

「あ、そうか。そうだね。気を付けるよ」

ジェミニが悪事を働いた時、スバルが近くにいれば対応できる。彼はウォーロックと融合……電波変換を行ってロックマンになれるのだから。地球の危機を二度……実は三度救っているロックマンがいれば、たいていの問題は解決してくれる。

ジェミニに害が無くなった以上、ロックマンの力は必要ないだろう。

ただ……ツカサにはもっと大きな問題がある。

「……ヒカルはどうしてるの？」

「……うん……」

ツカサの顔が本日でも最も暗い物になった。

ツカサには大きな秘密がある。二重人格なのだ。大人しいツカサの反面……凶暴性のみを凝縮したようなもう一つの人格。それがヒカルだ。今こうしてスバルと親友になれたツカサだが、ほんの数カ月前にはヒカルの言葉に惑わされ、スバルを裏切って深く傷つけたことがある。

ツカサの人生最大の悩み……それがヒカルだ。

「ヒカルは……最近はお出でこないんだ。以前戦った時以降、力が弱っているみたいで……」

「……そうなんだ」

「これについては、仕方がないよ。僕がなんとかしないといけないことだから」

「……そっか」

スバルもそれ以上は尋ねなかった。

「……さてと……スバルくん、僕は孤児院に帰るよ」

「分かった。僕も母さんが待つてるし」

「それじゃあ……ね」

バイバイとか、また明日とか……そんな当たり前の言葉を二人は使わなかった。

◇

薄暗くなってきた帰り道で、ツカサは今日のことを振り返った。海は楽しかった。スバルと泳いで競争をしたし、メガネを取ったキザマロの「3」のような目には笑ってしまったし、ゴン太はスイカ割りではしやぎ、ミソラとルナはなぜか水着を着ただけで泳ごうとしなかった。ミソラのパートナーのハープ曰く、女にとって水着は着るためにあるらしい。よく分からない。

今日は楽しい一日だった。思い出して笑みを浮かべる。同時に暗い顔をした。

「結局、スバルくんとしかろくに喋れなかったな」

ルナ、ゴン太、キザマロ、ミソラのこととは友人と呼んでいいのだろう。だが、それはスバルを中心として集まっているからに過ぎない。四人とは特別に親しいという訳ではない。そう呼べるのはスバルだけだ。

「こんなので、新しい場所で上手くやっていけるのかな？」

人付き合いは得意な方ではない。新しい孤児院の保母さんや施設の者たちと良好な関係を築けるのだろうか。学校にはどんな教師や生徒がいるのだろうか。考えると不安でしかない。なによりヒカルがまた何かをしないでかさないだろうか。

そんなマイナス思考をしていると孤児院に着いた。中に入って帰宅を告げると、年配の保母さんが出てきた。見知った彼女を見て、ツカサは動きを止めた。深刻な顔をしていたからだ。

奥に招かれ、椅子に腰かけて向き合おうと、保母さんは苦しそうに声を絞り出した。それを聞いて、ツカサは椅子を蹴飛ばすように立ち上がった。

「……両親……が……僕の両親が、会いに来る……だって？」

第2話 無力な僕

「なんだよそれ!」

ツカサの話聞いて、スバルは机を叩いた。別に怒られているわけではないのに、ツカサはビクリと肩をすくめた。

「それ……保母さんはいつ話を聞いたの?」

「今日、だって……僕たちが海に行ってる時に……」

保母さんから話を聞いた後、ツカサはスバルの家を訪ねた。もう夜だということは分かっているのだが、どうしても誰かに聞いてもらいたかったのだ。思い浮かんだ相手はスバルだけだった。

スバルは吐息荒く座り直した。隣ではスターキヤリアーから出てきたウオーロツクが浮遊している。

「……でも、もし仲を取り戻せるのなら、コダマタウンに住んでも良いって言ってるの?」

「……うん」

ツカサを10年以上も放っておいた両親からの配慮なのだろう。住み慣れた町で、友人とこれからもいられるようにと。

「……ねえ、どうしたい?」

「え、どうしたいって……?」

「ツカサくんはどうしたいの?」

この問いにツカサは迷った。いや答えられなかった。頭の中が真っ白になるのだ。何も考えられない。何も浮かばない。

「……急いで答えを出さなくていいよ」

「え?」

ツカサが顔を上げると、スバルは一転して明るい声をあげた。

「今のツカサくんはさ、疲れてるんだよ」

「……そう、かな?」

「そうだよ。だって、今日海に行っただけだから」

言われてみればそうだった。

「疲れているときに考えても仕方ないよ。一晩寝てから考えても良いんじゃないかな?」

「でも、両親が来るのは明日だよ？」

「来るまでに考えたら良いよ。来てもらったけれど、やっぱり会わないって言うのも手だと思うよ」

それはさすがに悪い事なのではないだろうか。という疑問が浮かんだ。だが、今考えても仕方ないというスバルの意見は正しい気がした。

「そうだね。今日は帰って寝ることにするよ」

「それが良いよ」

「じゃあ、僕はこれで」

ツカサはスバルに礼を言うのと部屋を後にした。階段まで来て気づいた。「夜遅くにごめん」と言うのを忘れていた。流石にこの時間に押しかけて、詫びの一言も無いのは悪いだろう。戻って部屋をノックしようとした。

「スバル、これで良いのか？」

ウォーロックの声が聞こえた。話の間一言もしやべらなかつた彼が、スバルに何を尋ねているのだろう。耳を澄ました。

「……どうしようもないよ……これは、ツカサさんと両親の問題だから……」

ツカサはノックしようとしていた手を遠ざけた。

「僕は、ツカサさんの両親が許せない。だからもう二度と近づくなつて言ってやりたい。けれど、両親とどういう関係になるのかは、ツカサくんが決めることだから」

「まあ、当然だな」

ツカサはドアから一步後ろに下がった。2人の言う通りだ。スターキヤリアーと共に、ポケットから抜き取った物を見る。

赤い押し花だ。これはスバルが摘んできてくれた花だ。ドリームアイランドにある、名前も無い花畑……ツカサの最も好きな場所で、スバルを裏切った最も忌み嫌う場所……。いつかそこでスバルのブラザーに……それが彼の夢だ。

そう、夢だ。

「夢は……叶わないから夢……なのかな……」

スターキヤリアーを手に持ったまま、ツカサは一階へと降りて行った。

◇

ツカサは真つ暗なところにいた。ああ、夢だなどとすぐに理解した。こういう場所には何度も来たことがある。それに記憶が正しければ、今は自室で眠っているはずだ。

周囲を見渡すと、やはりいた。小さいころのツカサがいる。その周りには意地悪そうな顔をした子供たち。この世界で何度も繰り返し見た光景だ。

「お願いだ。やめてくれ……」

いつも呟く。だが止まらない。子供たちは小さいころのツカサの周りに集まり、叩いてくる。親無し。捨てられた。いらぬ存在。子供たちは思いつく限りの言葉でツカサを虐めてくる。

そこに大人が駆け寄ってきた。虐めている子供たちを後ろに下がらせて、蹲っていたツカサを蹴飛ばした。私の子供に近づくな。親がない子供はロクな大人にならない。こんな子に関わってはいけない。低くても知性がある分、その言葉は子供たちの物よりも暴力的だ。

「好きで捨てられたんじゃない……」

聞こえていないと分かっているけど、ツカサは呟いた。

愚かな大人は、もう近づくなとツカサを再度蹴飛ばした。

「止めてくれ……」

それ以上はいけない。それ以上やると……あいつが出てくるのだ。

大人に蹴られた小さなツカサが、ゆっくりと立ち上がる。もう一度蹴飛ばそうとした大人の足を払いのけ、思いつき押し倒した。倒れた大人に馬乗りになり、手に持っていた石で顔を殴りつけた。大人の悲鳴が上がり、虐めていた子供たちが縮こまる。大人が血を流して悶えているのを他所に、小さなツカサ……いや、ヒカルは子供たちに襲い掛かった。

「止めてくれ……」

そこまですることは無いじゃないか。確かに、彼らがやったことは酷い事だ。それでも、ヒカルがそこまでして良い理由は無い。

ツカサは駆けだした。泣き叫んでいる子供に、なおも拳を振り下ろそうとしているヒカルの左手を取る。

「もう止めてくれ、ヒカル……」

ヒカルが振り返る。それは、今の自分と同じ年頃になったヒカルに代わっていた。

「ヒカル、君が暴力を振るって良い理由なんてない。もうやめてくれ」
ヒカルは何も答えない。ただツカサを見ているだけだ。このまましばらくしたら、この世界はいつの間にか消えている。それがいつもの結末だった。

だが二人の世界に割って入ってくる声があった。

「クククク、止めてくれだってよヒカル」

ヒカルの背後に黄色い塊が生まれた。ツカサは目を疑った。こいつをツカサは知っている。忘れない、けれど忘れてはならない存在。

「ジエミニ!?!」

黄色い塊に黒い仮面が浮かんだ。

「御名答。雷神のジエミニ様だ。お前らの中から蘇ったぜ」

雷神のジエミニ。ツカサのスターキャリアーにいる白いジエミニの元となった存在だ。

かつて地球に侵略してきたFM星人の一人……いや、その首謀者だ。実際に侵攻を決定したのはFM星王ことケフェウスだが、彼に戯言を吹き込み、疑心暗鬼に陥らせ、甘言で裏から操っていたのは、この男だ。

悪事はそれだけにとどまらず。地球に来てからはツカサに憑りつき、ヒカルと意気投合して共に多くの事件を引き起こしていた。

ツカサの何よりの汚点は、彼とヒカルに惑わされて、スバルを裏切ってしまったことだ。

そのジエミニが目の前にいた。

「なんでお前が……」

「残留電波って知ってるか？ 俺は確かに死んだが、お前の体内に

データとして残っている。お前が生きている限り、復活するんだよ。何度でもな」

「そ、そんな……嘘……」

「嘘じゃねえよ。お前が電波変換できていたのもそれが理由だ」

ジェミニの力が体内に残っていたことはツカサも知っている。だがこの凶暴な人格まで残っているとは思わなかった。白いジェミニが生まれたことから、人格は消えたと思っていたからだ。

「なんで今になって……」

「分からねえか？」

「……両親？」

「なんだ、やっぱり分かってるじゃねえか。お前が大きく動揺してくれたおかげでな、お前の体内の奥深くから出てこられたってわけだ」
悔しきで自分を殴りつけたくなった。

「まったく、苦労したんだぜ。お前ら二人分の精神があるからよ、複雑に絡み合っていてほとんど身動きが取れなくて、地獄みてえだったぜ」
「そのまま永遠に出て来なかったら良かったのに……」

「だからこそ、お前のおかげだぜツカサ」

ジェミニはスツとヒカルの側に移動した。

「聞けヒカル。お前の願い、俺なら叶えてやれる」

ずっと黙って2人を見守っていたヒカルが、ジェミニの方を見た。

「止めろヒカル！ そんな奴の言葉に耳を貸すんじゃない！」

だがヒカルはジェミニから目を離さなかった。

「ツカサが協力しない以上、地球人の体は手に入らねえが……お前の精神とだけ電波変換することはできる」

ヒカルの眉がピクリと動いた。口がゆっくりと開く。

「そんなことができるのか？」

「力が大きく落ちちまうがな。だが、電腦に入って中から操作することと支障はねえ。俺もこんなところからは、さっさとおさらばしたいんだ。自由になろうぜ？」

そんなことされてたまるものか。ツカサはいまだに掴んでいたヒカルの左手を引っ張った。

「やめろヒカル！」

ヒカルがようやくツカサの方を見た。数秒間見つめ合った後、ヒカルはジェミニの方を見た。ヒカルの手が、ツカサの手を振り払った。そのままジェミニに手をさし伸ばした。

「ジェミニ、お前の力を貸せ」

「おう、任せておけ」

ヒカルの手がジェミニに触れようとする。ツカサはなりふり構わずにジェミニにつかみ掛かった。ジェミニをヒカルから遠ざけようとする。だがびくともしない。ツカサがどれだけ動かそうとしても、ジェミニはその場から少したりとも動かない。

「な、なんで……？」

「ククク、ここは精神の世界だ。意志の強さがそのまま強さになる。つまり、てめえはこの程度だつてことだ」

ジェミニが雷撃を放った。ツカサは大きく吹き飛ばされて転がった。

「ま……待、て……」

起き上がろうとしても体が動かない。これがツカサの意志の弱さだと、世界全体が笑っているようだった。動けずにいるツカサが最後に見たのは、ヒカルの手がジェミニに触れるところだった。

◇

「止めろー！！」

ガバリとツカサは身を起こした。

「ハア、ハア……ハア……」

全身から滝のような汗を流しながら、ツカサは周囲を窺った。幸い部屋の中は薄明るい。時間帯は明朝と言うところだろう。ここは自分の部屋だ。孤児院に設けられた自分の部屋だ。小さいが布団を敷けるスペースはある。その布団が目に入った。いつの間にか這い出て、タンスの側にまで来ていたらしい。

ようやく自分が持っている物に気づいた。スターキャリアーだ。寝る前には、タンスの上にも置いておくのだ。中では白いジェミニが不安そうにこちらを見ている。

「……あ!？」

胸を抑えた。いない。いないのだ。

「ヒカル……」

ヒカルがいない。自分の中にいたヒカルがいなくなっていた。

「夢じゃない!？」

慌てて立ち上がって、スターキャリアーを掲げた。

「電波変換 双葉ツカサ オン・エア!!」

いつもの合言葉を叫んだ。だが何の変化も無い。白い光が出て来てツカサを包み込むはずなのに、何も起きない。

「やっぱり……」

先ほどの夢ではなかった。ヒカルはジェミニと電波変換をして、出て行ってしまったのだ。

「ヒカル……あ! ジェミニ、スバルくんに電話!」

スターキャリアーの中で白いジェミニが慌ててブラウザ画面を開いた。ヒカルとジェミニはスバルとウォーロックを恨んでいる。もしかしたら、襲われているかもしれない。

コール音が何度もなる。お願いだ。無事でいてくれ。心臓が張り裂けそうなほどに鳴り響いている。無限のように長い十数秒の後に、ブラウザ画面にスバルが映った。

「どうしたの、ツカサクくん?」

寝ぼけた顔をしたスバルがいた。後ろではウォーロックが欠伸をしながら頭を押さえている。どうやらスターキャリアーの中で寝ていたウォーロックが目を覚まし、スバルを起こしたらしい。

「ス、スバルくん。大変なんだ!」

「大変?」

スバルはまだ眠そうな目を細くした。ツカサの鬼気迫った雰囲気には気づいたらしい。

「あ、あのヒカルが……ジェミニが……」

「ジェミニ!？」

スバルが叫ぶと、後ろにいるウォーロックが目を見開いた。

「どういこと!？」

「あ、えつと……あの……ヒカルとジェミニが……その」

スバルが尋ねてくるが、ツカサは焦って言葉が出てこない。何から説明をすればいいのか。

だがここはウォーロックがまとめた。

「スバル、詳しい話は後だ。電波変換して外に出るぞ。あいつらのことだ。何か事件を起こしているはずだ！」

「わ、分かった！ ツカサくん、後でね」

「う、うん……」

電話が切られた。ツカサは胸に溜まっていた空気と焦りを盛大に吐き出した。すると手足が震えてきた。力が入らずに膝をつき、倒れそうになって手で体を支えた。白いジェミニが慌てて外に飛び出して来た。

「だ、大丈夫だよ」

心配そうなジェミニの頭を撫でてあげる。

「ち、力が抜けただけだから……」

とりあえずスバルは無事だった。それどころか、もう全てが大丈夫だ。ジェミニは言っていた。力が落ちると。ならば今のヒカルとジェミニはスバルとウォーロックの敵ではない。あの二人に任せておけば、ヒカルとジェミニはすぐに捕まるだろう。

そう、もう安心していいのだ。それなのに胸から熱が込み上げてくる。それは目へと移動して、熱い滴を滴らせた。

「情けない……」

力が入らない手で、床を叩いた。

「僕は、何もできないのか……」

第3話 僕の望み

まだ日も登り切っていないのでコダマタウンは灰色だ。夏の暑さが幾分か和らいでいるこの町中をツカサは歩いていった。

今頃スバルはヒカルと戦っているのだろう。あの後もうひと眠りなどできるわけもなく、かと言ってじっと待つこともできず、できることもなく、今はこうして当てもなく歩いている。

「意外と人はいるんだね……」

こんな時間だから人は少ないと思っていた。だが、もう出勤しているスーツ姿の男性や、ランニングをしている人がいる。あの大きなカバンを持っている高校生は部活だろうか。皆やることがあって、すべきことがあって……この時間に何の意味もなく歩いているのは、世界中を探しても自分だけではないのだろうか。

「……あ」

気づけばコダマ小学校の校門前に立っていた。毎日登下校していたので、無意識に足を運んでいたのだろうか。白いというには少し汚れている校舎を見上げた。

この大きな建物の二階に、ツカサたちの5―A組がある。とても良いクラスだったと思う。少々我儘ではあるが、強いリーダーシップと優しさを持っているルナと、腰巾着のゴン太とキザマロ。多少の喧嘩こそあれど、虐めなどもない、こんな平和なクラスはそうそう出会えないだろう。

引越し先の学校はどんなところなのだろう。虐めが横行しているのだろうか。それどころか虐めっこのリーダーがいるクラスに編入するのだろうか。いや、ツカサが入ったことでクラスの調和が乱れて、虐めの引き金を引いてしまうかもしれない。

もしそうになったら、担任教師は相談に乗ってくれるだろうか。育田道徳先生の顔を思い出した。顔の幅は少々大きく、何より爆発したよくなアフロ頭が印象的だ。授業の合間に聞かせてくれる話も面白く、なによりも子供たちの味方をしてくれる理想の先生と言えるだろう。そんな育田先生とも離れることになる。

校舎の右側に目を移すと、体育館の屋根が見えた。文化祭の思い出が蘇る。ルナの提案で、当時は謎のヒーローだったロックマンの劇をした。今思えばツカサがロックマンの役に抜擢されたのは何の因果だったのだろうか。まあ、結局スバルが代行することになったのだが……。ロックマンがロックマンの役をする。今思うと笑ってしまう。そんな良い思い出がこのコダマ小学校には沢山ある。だがもう、ここに通うことは無いのだ。

「もし、両親と暮らしたら……」

彼らはこの町に住んでもいいとすら言っているらしい。俯いて、足先を右に向けた。引きずるように校門から離れて行った。

少し歩いて、ふと階段が目にとまった。学校の裏山へと続く階段だ。フラリと吸い込まれるように登っていく。長い階段が終わると広場へ出る。隅に展示されている機関車に、小さなベンチと花壇。それらを通り過ぎて鉄の階段を上ると、そこは見晴らし台だ。町を一望できる、コダマタウンで最も高い場所だ。

手すりにもたれかかるようにして、ツカサは町を見下ろした。

「ここ、スバルくんのお気に入りの場所なんだ」

スターキャリアーに話しかけた。白いジエミニは飛び出すと、景色を見て小さく飛び跳ねた。こういう時、話しかける相手がいるとありがたい。

「こんなに、名残惜しいと思う日がくるだなんてね」

正直に言つて、この町が好きかと問われたらツカサは返答に困る。別に嫌いなのではない。好きでも嫌いでも何でもないのだ。何の感情も抱かないから感想すらないのだ。

やはり今ツカサを縛り付けているのはスバルなのだろう。彼と出会えてから、それなりに良い程度だった生活に、光が差した。彼がいたから、この町での生活が楽しい物になった。もう少し長く住んでいたら、この町を好きになれていたのかもしれない。

「やっぱり、僕は……この町を離れたくないよ」

もつとスバルと一緒にいたい。共に学校に行つて、ルナたちとも

もつと仲良くなりたい。今の暮らしを続けたい。

だがそれは、両親と暮らす道を選ぶということだ。

「……僕は……」

その時だった。ツカサの後ろでヒュンと音が鳴った。振り返ると、青い光がロックマンに変化するところだった。

「スバルくん！」

「ここにいたんだね」

スバルは電波変換を解くこともなく、ツカサに頭を下げた。

「ごめん、ヒカルとジェミニに逃げられちゃった……」

◇

スバルの説明によると、コダマタウンのウエーブロードでジェミニ・スパークBを発見したらしい。彼らの戦闘力は低く、以前戦った時よりも数段階弱くなっていた。やはり、地球人の肉体を手に入れていないというのが原因らしい。

FM星人もAM星人も、地球では本来の力を出せない。依代として地球人の肉体を手に入れる必要があるのだ。それも自分と相性のいい体でなければならぬらしい。ジェミニがヒカルとツカサに執着するのはそれが理由だ。

つまり、今のヒカルとジェミニが電波変換した、ジェミニ・スパークBはロックマンの敵ではない。それでもある家のガス給湯器の電脳に逃げ込まれ、誤作動を起こされてしまった。寝ている住民を見捨てることなどできるわけもなく、スバルは電脳の修復に勤しむしかなく……その間に逃げられてしまったらしい。

「とりあえず、その家の人はもう大丈夫だよ。起きたら壊れていることに気づくと思うし」

「そっか、ヒカルがそんなことを……」

顔も知らない人に、また迷惑をかけてしまった。

「どうして、そんなことができるんだ……」

何の関わりも無い人にどうしてそんな酷い事が出来るのだろうか。自分の為だけに、そんな使い捨てのようなことができるのだろう。

口を悲しく結ぶツカサの肩に、ポンとスバルの手が置かれた。

「ツカサくん、考えるのは後。今はヒカルを止めるのが先だよ。彼の行き先に心当たりはないかな？」

「行き先……」

ツカサは考える。ヒカルの行き先と言えばどこだろうか。それほど悩む時間は必要なかった。ヒカルの目的は両親への復讐だ。そして彼らは今日、何で来ると言っていただろうか。

「TK空港……」

そう、飛行機で来ると言っていた。ならばヒカルたちが空港へ行く可能性は高い。

「なるほど。じゃあ行ってくるよ」

ウエーブロードへと飛び上がろうとするスバルの手を、ツカサは飛びかかるように掴んだ。

「ま、待って。僕も行くー！」

驚くスバルに、ツカサは舌に躓きながら訴えた。

「ヒ、ヒカルを止めたいのは、僕も一緒だ。僕だって、じ、自分にできることをしたい。い、いや、探したいんだ。だからスバルくん、僕も行くよ。って、そっか。今は電波変換できないから、勝手にバスで行けば良かったんだ……」

必死になり過ぎていて変な行動をとってしまった。恥ずかしそうに頭を掻いた。

ツカサの苦笑いはすぐに疑問に変わった。彼を見るスバルの目が微妙な物に変わっていたからだ。

「えっと、スバルくん？」

てつきり、応援してくれると思っていた。一緒に頑張ろうと言ってくれるとも。だが彼は特に反応を示すことなく、もの言いたげな目でツカサを見ているだけだった。

嫌な沈黙が起きてしまった。それを払うように声が上がった。

「おいスバル、ツカサに言わなくていいのか？」

ずっと黙っていたウォーロックだった。彼の言葉に、スバルは数秒黙ってから首を横に振った。

「いや、良いよ」

「……そうか……」

「あ、あの二人とも。何の話をしているの？」

スバルとウォロツクの間だけで話が終わってしまった。何か自分に関係がありそうな雰囲気であってにもかかわらずだ。

「良いんだよ、ツカサくん。じゃあ、僕は先に空港に行くね？」

「……うん」

頷くが早いのか、スバルは青い光になってウエーブロードへと消えてしまった。きれいにはぐらかされた気がする。

だが考えても、ここにも仕方ないだろう。ツカサが階段を降りて行くと、すぐ近くのバス停に、TK空港行きのバスが来たところだった。

第4話 君なんて

少々薄暗い空間にヒカルはいた。ここはTK空港の電腦だ。周りにはコンテナや金属探知機などを象ったデータが多数並んでいる。普段は休みなく動いて、空港で行われる多忙な業務データを処理しているのだが、今は全く動いていない。理由は単純、ヒカルとジエミニがシステムダウンを起こしたからだ。

今、彼らはあるデータを探していた。絶えず動いているとお目当てのデータがどこに流れていくのか分からなくなってしまったため、やむを得ぬ対応だった。

「畜生、どこにあるんだ？」

ヒカルは舌打ちをして手にしたプレート型のデータを放り捨てた。隣のアタツシケースの形をしたデータを手に取り、エレキソードで無理やり開いて中を見る。先ほど投げ捨てた物と同じ、プレート型のデータが何十枚と入っていた。

「まるで宇宙の中からちっぽけな隕石を探すようなもんだな」

ジエミニの例えはよく分からないが、海の中から小石を探すようなものだと言いたいのだろう。

「そう思うのなら手伝えよ」

「カリカリしてんな。前みたいに仲良くやろうぜ？」

「そんな気分じゃねえ……」

「……つたく、俺はお前の手下じゃねえんだぜ？ あくまで、お前に力を貸してやってるだけだ」

「俺のおかげで自由になれたんだだろうが。お前、ロックマンと戦ったのか？」

空港のシステムダウンなどという大きな事件を起こしたのだ。遅からずロックマンは駆け付ける。

「……その言葉を二度と口にするな」

ジエミニはヒカルの隣に降りて、別のアタツシケースを開いた。言われるまでも無い。ヒカルだって、ロックマンのことは思い出したくもない。ツカサの元を離れて幾ばくもしないうちに、ロックマン

に見つかった。『ツカサくんからの電話を受けて探してみたら、やっぱり』とか口にしていた。

戦ってはみたが無駄だった。まるで歯が立たなかった。斬撃が受け止められるとか、攻撃を避けられないとかそんなレベルではない。小さな子供が格闘家に挑む様なものだった。以前戦った時はこれほどの実力差は無かった。単にロックマンが強くなっていただけのも理由だろうが、地球人の肉体を手に入れていないためジェミニの実力が出せなかったのが大きな原因だろう。

あつという間に組み伏せられた。だから恥を忍んで頼んだ。「見逃してくれ」と。スバルとウォーロックの驚いた顔を思い出すと怒りが沸騰する。ああ、こつちだつて死ぬほど嫌だった。今までに何度も邪魔をしてきたロックマンに、命乞いをするだなんて。その後隙をついてなんとか逃げ出した。尻尾を巻いて逃げる負け犬のように。

それでもやらなければならないことがあった。どれだけ恥をさらしてもやらなければならないことがあるのだ。

目を閉じれば思い浮かぶ。自分を見下ろす連中。嘲笑う声。醜い笑み。

ああ、燃える。燃えてくる。怒りが込み上げてくる。殴っても殴っても、殴っても殴っても殴っても止まらない。むしろ激しく燃え上がってくる。治まらない。納まらない。

それは至極当然という物だろう。あいつらは八つ当たりの的にすぎない。根本的な解決にはならない。そう、問題の原因は別にある。

あいつらだ。あいつらが悪いのだ。ツカサを、自分たちを捨てたあいつらが……。

「見つけたぞ」

ハツと我に返った。

「おいおい、俺を働かせてさぼってんのか。良いご身分だなてめえ」
「うるせえよ」

ヒカルが物思いに耽っている間に、ジェミニは幾つかのアタッシュケース型のデータを開いていた。ジェミニが持ってきたプレート型のデータと、ここに来る前に手に入れた名簿データを照らし合わせ

る。

「……間違いないな」

「ああ、これがアクセススキーだ。お前の両親が乗る飛行機のな」

飛行機の電腦には嚴重なアクセス制限がかかっている。幾らジェミニ・スパークBの力でも入るのは困難だろう。だがこのアクセスキーがあればなんら問題は無い。

「おらよ、大事に持つとけ」

ジェミニはアクセススキーを放り投げるように渡した。受け取りながらヒカルは尋ねる。

「おいジェミニ、なんでお前は俺にそこまで力を貸す？」

「決まってるんだろ。ツカサの体から離れて自由になるためと……ウオーロックと星河スバルに吠え面かかせてえだけだ。その為だったらなんでもするぜ、俺は」

「……そうか」

まあなんだったっていい。ジェミニの目的にはさほど興味は無い。彼の力があるから、こうしてツカサから離れて行動できるのだ。ありがたく利用させてもらおう。

「なあヒカル、この計画だが全部俺に託してみねえか？」

「体を超越せと言いたいのか？」

ツカサの体が無いのに体と呼ぶのもおかしい気がした。

「話分かるじゃねえか。そうすれば俺たちの戦闘力が上がる。全力には程遠いが、ロックマンとも善戦できるはずだぜ」

ロックマンと戦えるようになるというのは、確かに魅力的な話ではあった。だがヒカルは首を横に振った。

「断る。両親への復讐は俺の手でやる」

「そうか。ならせいぜい頑張れよ」

ヒカルは名簿データを見つめた。今までは存在することしか知らなかった両親。彼らの顔と名前が載っている。年齢、職業、現在の住所とスターキャリアーのアクセス番号……あらゆる個人データが書かれている。それを叩き壊した。

「俺はやるぞ、ツカサ……」

自分にはこれしかないのだ。

他にもやり方はあるのかもしれない。それでも、自分の目的のためにはこれしか思い浮かばない。これしか分らないのだ。

それがヒカルという存在なのだから。

アクセスキーを握りしめて、ヒカルは電腦空間から外に出た。

「見つけたぞー！」

嫌な声が出た。ウェーブロードの真ん中にロックマンが立っていた。

「よくもこんな酷い事を……」

相変わらず小奇麗な目で、これまた綺麗言を口にする。ご立派な正義のヒーロー様だとヒカルは鼻で笑った。

◇

ツカサはバスから駆け降りた。目の前の大きな建物はTK空港だ。無駄だと分かっているも周囲に目を走らせる。

「スバルくん、どこ？」

空港の入口に向かって走って、すぐに足を止める。入口には警備員と大勢の人たち。どうやら空港は現在封鎖中らしく、怒った客が無責任に喚いているらしい。

「また、ヒカルがやったのか……」

原因は間違いなくヒカルだろう。あいつはまた悪事を働いているのだ。

「こんなに大勢の人に迷惑を……」

入り口前で騒いでる人たちのほかには、電話で会社と電話をしているらしいスーツ姿の男性や、大きな旅行鞆を持った若い夫婦らしき人がある……いや、その人の腕の中には赤ん坊がいて、泣き始めてしまった。

ツカサはあやしている夫婦をしばらく見てから走り出した。

「このままじゃいけない。僕が、僕が何とかしないと……」

何はともかくヒカルを見つけなくてはならない。ヒカルを見つけさえすれば、スバルに連絡するなり、説得したりはできるはずだ。

どこに行けばいいのだろう。どこを探せばいいのだろう。空港の

中に入ることはできない。ならば外だ。可能性は低いかもしれないが外を探そう。もし外にいたとしたら、すぐ近くのはずだ。

そうして訪れたのは駐車場だった。沢山の車が並んでいる中をツカサは走った。耐えず左右に首を振って、2人の姿を探す。見つけた。空港の奥の方、人目につかないところにロックマンとジェミニ・スパークBがいた。

「スバルくん！」

ロックマンとジェミニ・スパークBがツカサに気づいた。ロックマンはロックバスターをジェミニ・スパークBに向けていた。スバルとウォーロックの目だけがツカサの方を向いていた。

ジェミニ・スパークBはというと、全身に赤い傷が出来上がっていた。顔も腕も腹も、腰にも足にも大小の傷がある。もう戦うことはできないようで、膝をついて肩で息をしていた。丸くした目で、銃口を突きつけられているのを忘れたかのように、ツカサを見ていた。

もう戦いは終わっていた。ツカサの出る幕などなかったのだ。分かつてはいた。分かってはいたのだ。最初からツカサにできることなどないのだ。だがそれがどうしたというのだろう。それで納得できるのなら、ここに駆け付けたりなどしない。

「ヒカル！」

気づけば叫んでいた。彼の名を呼んでいた。

叫んでから言葉に迷った。何を言えればいいのだろう。何を伝えたいのだろう。だが考えてる余裕が無かった。

「なんで……なんでこんなことをするんだ！」

スバルがゆっくりと後ろに下がった。

「なんで、だと？ 決まってるだろ、復讐だ」

訊くまでも無い事だろという態度でヒカルは言った。

「そんなに両親が憎いのか……」

「ああ憎い。憎くて憎くて……頭がどうにかなくなっちゃまいそうだ！」

ヒカルの拳がアスファルトの道路を砕いた。

「お前だってそうだろ、ツカサ!？」

ぎらついたヒカルの目を見て、ツカサは一步後ろに下がりそうに

なった。だが浮かせた足を前に踏み出す。

「違う。僕はこんなこと望んでいない！」

ヒカルが心底意外な顔をした。

「何言ってるんだ。お前だってあの時……」

「確かに、あの時は君たちの誘惑に負けてしまった。けれど、もう昔の僕じゃない！」

先ほどコダマタウンを見て回って来た。以前と違って失いたくないという思いがあった。

「皆とも仲良くなれた。まだ本当の友達とは言いきり辛いかもしれないけれど、もつともつと仲良くなりたくなって、今は思っている……そうしておけば良かったとも後悔している……」

そうだ、今の自分はこれだけ積極的になれているのではないか。

「臆病で、誰かと関わるのが怖くって、ビクビクしていた僕じゃない。僕は変わったん

だ！ 両親のことは……今でも許せない。けれど、こんな大勢の人に迷惑をかけてまで、復讐したいだなんて思っていない！」

だから言うべきなのだ。ヒカルにこの言葉を。

「ヒカル、君なんていらない！」

言ってやった。やつと言葉にできた。自分がヒカルについて思っていることを、やつと言ってやったのだ。

ヒカルの目から光が消えた。腕をだらりと垂らして、全身の力が抜けたかのように項垂れた。

満足そうにツカサは頷いた。

「や……った……。スバルくん、止めをお願いしていいかな？」

ようやくスバルの役に立てた。今のヒカルは抵抗どころか逃亡すらしないだろう。そう思っただけで振り返ったツカサが見たのは、スバルの責めるような目だった。

「……スバルくん？」

なぜだろう。なぜスバルはこんな目をするのだろうか。ウォーロツクに至っては、軽蔑の眼差しだ。

「てめえ、自分が何を言ったのが分かってんのか？」

「……何？」

分からない。自分はスバルとウォーロックの力になりたくて、精一杯のことをしたのだ。なぜ責められなければならないのだ。

「ククク、クヒャーハハハハ！」

突然ジエミニ・スパークBが大声で笑い出した。耳触りの悪い、人を逆なでするような笑い声だった。

「いやあ、ありがとうよツカサ。おかげで体が入ったぜ」

「……ジエミニ!？」

「その通りだ」

ニヤリと笑ったその表情はヒカルの物とは毛色が違っていた。ジエミニだ。ジエミニがジエミニ・スパークBの体の所有権を得たのだ。

「ヒカルは……?」

「お前が心を折ってくれたからな。すかさず奪い取らせてもらったぜ」

ああ、なんてことだろう。ヒカルが戦意喪失してくれたおかげで、スバルの負担を減らせたと思ったのに……。FM星人は地球人の心を完全に乗っ取った方が力を発揮できるのだ。これでは敵を強化してしまったことに等しい。結局ツカサは足を引っ張ってしまっただけだ。

「いやあ、愉快愉快。地球人ってのは恐ろしいな。俺でもなかなかできねえよ今のは」

ジエミニにまでバカにされた。ツカサの口が震える。

「ま、まるで僕が君より酷い事をしているみたいと言わないでくれ！」

「みたい、じゃねえよ。その通りだからだよ」

「違う、僕はただスバルくんの力になりたくって……」

「あ? ああ、そっちじゃねえよ」

ジエミニは手でヒラヒラと否定した。

「ヒカルに対してだ」

「……ヒカルだって。ヒカルがどうかしたって言うんだよ」

「本当に何も理解してないんだな、お前は」

「な、なにが……」

「ああいい。もういいぜお前は」

しっしと手を振ると、ジェミニは近くにあった車に、手を置いてもたれなかった。

「さてと、真に自由になったのは良いが……」

ジェミニはもうツカサを見ていなかった。ずっと趨勢を見守っていたロックマンを見ている。

「認めたくねえが、今の俺じゃお前らには勝てねえ。ダメージも負っているしな」

「逃がさないよ」

ロックマンは剣を構えて駆け出した。だが遅かった。

「ツカサを守らなくていいのか!?!」

ロックマンは何か気づいたように急ブレーキをかけると、ツカサを抱きかかえて空に跳躍した。あつという間に空を舞うツカサ。下の方で大きな爆発音がした。見ると、先ほどジェミニ・スパークBが触れていた車が大爆発を起こしていた。ツカサがいた辺りには細かい破片が飛び散っている。あれに当たっていたら入院ものだっただろう。

「スバルくん、ジェミニは……」

「逃げただろうね……」

「……そっか……」

最初から余計な事などしなければ良かった。という後悔と同時に、別の理由で胸が苦しくなった。なぜだろう。ジェミニの言葉が耳から離れなかった。

第5話・僕は…

TK空港は一応の落ち着きを取り戻した。現在は管理システムが再起動し、不備が無いかチェックをしているらしい。復旧するまでは、TK空港に離着陸する予定だった飛行機を、他の空港と協力して捌いていくことになるだろう。

そのアナウンスを聞いて、バスターミナル近くのベンチに腰掛けていたツカサは少しだけ胸をなでおろした。空港への被害は最小限に抑えられたと言っているだろう。サテラポリスもすでに到着しており、空港内部と爆発のあった駐車場へと展開している。もうこの空港は大丈夫だ。ヒカルが大きな事件を起こさなくて良かった。

おずおずと隣に座っているスバルを見る。彼は空港を見上げたまま、こちらに見向きもしない。先ほどのミスを怒っているのだろうか。

いや、彼はそういうことで腹を立てるような人ではない。

「あの、スバルくん……」

話しかけようとすると、スバルはベンチから立ち上がった。

「ツカサくん、僕は空港の電腦を調べてくるよ」

どうやら怒っているわけでは無いらしい。

「電腦に？」

ツカサも立ち上がる。

「うん、ヒカルとジェミニが何をしていたのか探ってみるよ」

ヒカルとジェミニがここで探していたものを、スバルはまだ把握していない。ここに来た時には、あの2人は用事を終えていたのだから。

どうやらそれで空港を睨んでいたらしい。先ほどよりも数十倍ホッとした。

「そっか、分かったよ」

「うん、それじゃ」

スバルが電波変換をしようとする、スターキャリアーからウォーロックの声がした。

「おい、スバル。いい加減にしやがれ」

なにやら不機嫌そうな声だった。

「さっきのを見て、まだお前は何も言わねえのか?」

スバルにはではなく、ツカサのことを言っているのだと理解した。スバルは目をそらして黙っているだけだ。

「……ねえ、ウオーロック」

思い切ってツカサは尋ねた。

「あ?」

「僕のこと……だよな?」

「ああ、そうだ。お前の卑怯っぷりに腹が立ってんだ」

不意打ちのように胸を刺す一言だった。

「ひ……ききよう?」

「ロック!」

「なんだよ、本当はお前が言うべきことだろうが」

怒鳴るスバルをウオーロックは一蹴した。

「おいツカサ。お前はスバルの親友だ。俺の相棒の親友だ。だがな、そのスバルが言わねえってんなら、俺が代わりに言っつてやる。お前はに……」

「待って!」

引き裂くようにスバルが叫んだ。

「言う。言うから……僕の口で言うから……」

「……最初からそうしろってんだ。回り道しすぎなんだよ」

スターキャリアーが静かになった。スバルが深呼吸をする。目を開ける。

「ツカサくん、少し厳しい事を言うよ?」

「……うん」

まだウオーロックの言葉から立ち直れてはいない。だが聞かないという訳にはいかなかった。

スバルは唇をかむと、ゆっくりと口を動かした。

「逃げないで」

「……え?」

何を言われているのか分からなかった。

「逃げないって、僕が何から？ 僕は自分にできることを探しているつもりなだけけど……何もできていないけれどね」

この事件が起きてからツカサにできたことは何一つない。スバルに連絡を入れて丸投げして、町の中を歩いて自分の気持ちと改めて向き合って、この空港に駆け付けてヒカルに怒鳴っただけだ。

これでも自分なりに何とかできないかと考えた結果だ。

「少なくとも、僕は逃げてなんかいないよ」

「違うよ。君はヒカルから逃げている」

あっさりとしてスバルは首を横に振った。

「ヒカルから……？ 何を言っているんだい。スバルくんだって、さつき見ていたじゃないか。僕はヒカルに立ち向かった。いや、失敗しちやっただけだ……」

「違うよ。ツカサくん、あれは逃げているだけなんだよ」

「……何を言って？」

否定してはいる物の、ツカサはあの時にスバルが向けてきた目を思い出していた。落胆したときの物だった。ツカサに何らかの落ち度があったのだろうか。

「今の君は無意識のうちに、心のどこかで否定しているだけなんだよ」

それにねとスバルは付け加えた。

「君はもう気づいているはずだよ。今、何をすべきなのか……」

話している間にスバルの声はだんだんとか細くなっていた。

「……スバルくん……」

「……ごめん、僕が言えることは、これで全部だ」

スバルは膝を持つように前屈みになり、「ハー」と息を吐き出した。スターキャリアーから「まあ、お前にしては頑張ったんじゃないか」という声が聞こえた。

「じゃあツカサくん。僕は行くね」

「……うん」

「……信じているからね」

それだけ言うと、スバルは電波変換して消えてしまった。

またツカサは置いてぼりだ。だが寂しいという気持ちは無かった。「僕が……ヒカルから逃げている？ 気づいている？」

スバルの優しさを、ツカサは改めて認識した。そんな彼が自分を傷つけてまでしてくれた忠告……いや、アドバイスというべきか。

「……分らないよ、スバルくん」

自分はヒカルの何から逃げているのだろう。何に気づいているのだろう。それがこの事件を解決するカギになるのだろうか。電波変換すらできなくなった自分が、何の力になれるのだろうか。

「……いや、分らないじゃダメなんだよね」

もうすぐ引越すことになるかもしれないのだ。スバルのいないところへ行くのだ。自分で考えて答えを出さなくてはならない。

「やろう。できることを、思いついたことを、なんでもやってみるんだ」

結局、人はそれしかできないものだ。

ツカサが少し考えて思いついたのは、あの場所に行くことだった。

「ゴミ捨て場……あそこに行こう」

ツカサが捨てられた場所。ツカサが両親への憎しみを作り、ヒカルが生まれた原因の場所。あそこに行けば、ヒカルを理解できるかもしれない。

論理的根拠などない。ただ「こうすれば少しはマシかもしれない」という甘い希望論でしかない。それでもツカサが思いついた、今できることはこれしかないのだ。

「よしー」

思い立ったツカサはバスターミナルへと走り出した。そしてすぐに足を止める。

「あ……ダメだこれ……」

幾つもあるバス亭の前には長蛇の列ができていた。空港が機能しないと分かった人たちが一斉に引き上げているのだ。タクシー乗り場の方も同じ様子だった。

「これじゃあ移動できない……」

今から並んでも、順番が回ってくるのはどれくらい先だろう。

「どうしよう……?」

素直に並ぶしかないのかと、肩から落胆したときだった。その肩にバシリと手が置かれた。

「困っているみたいだな、少年」

驚いて振り返ると、一人の青年が立っていた。白い服と藍色の髪の毛が特徴的だった。眉は太く、目はキリツつとしていて、鼻は適度に高い。控えめに行つてかっこいい顔立ちだ。そんな彼は、驚きで声も出していないツカサにスツと手を差し出した。

「お近づきのしるしにどうだい。うまいぞ」

彼の手を持っている物を見て、ツカサは更に硬直した。

「……うまい棒?」

「そんな名前なのか。さつき空港の売店で買ったんだが、美味しいよなこれ」

ツカサに持つていたうまい棒を渡すと、背負っていた鞆からもう一本別のうまい棒取り出し、1秒で封を切つてサクサクサクと軽快に食べ始めた。

ツカサはただただ固まるしかない。

「うん、本当にうまい!」

「……あの……」

「おつと悪い、本題を忘れるところだった。見たところ移動手段が無くて困っているんだろう?」

「あ、はい……」

「よし、なら俺のバイクに乗ると良い。送つていくよ」

青年の行動がインパクト過ぎて気づかなかつたが、彼の後ろにはこれまた白いバイクが壁に立てかけられていた。駐車違反ではないのだろうか。

青年は慣れた手つきでツカサの傍までそれをひいてくる。

「あ、あの……」

「さあ乗った乗った」

青年はヘルメットをかぶりながら、ツカサにも渡してくる。これは誘拐か何かだろうか。だが悪人と言う風には見えない。むしろ彼の

爽やかさには惹かれるものがあつた。青年に促されるまま、ツカサは青年の後ろに跨った。

◇

バイクは風を切り、景色を後ろへと飛ばしていく。と言つてもヘルメットのせいで視界は狭く、青年の背中に掴まっているのでほとんど見えないのだが。それでもバイクは便利だなとツカサは思う。車両が並んで止まっている側をすり抜け、赤信号の前まで進めるのはちよつと得した気分だ。これならバスを使うよりもよつぽど早くつけるだろう。

そして少しばかり申し訳なくなつた。この親切な青年に甘えた分の成果を、自分は果たすことができるのだろうか。

川を超える大きな橋に着いたとき、青年が声をかけてきた。

「悩んでいる顔だね」

「え。分かるんですか?」

青年はずつと前を見て運転している。当然ツカサの顔など見てはいない。

「フッフ、ヒーローに見抜けないものないのさ」

「……ヒーロー?」

「なんてね。空港で見かけたときから、なにか思い悩んでるなと思つてみていたんだ」

「……あ、はい」

反応に困る冗談だ。黙ることもできるが、バイクに乗せてもらつている身を考えると、それは申し訳ない気がした。

「ずつと、ずつと悩んでいることがあるんです」

「ずつとと言うことは、何時間も悩んでいるのかい?」

「いえ、何年もです……」

「そんなにかい!?!」

驚いたように青年が背中を逸らした。ツカサの体も後ろに傾いて、少しヒヤツとした。バイクの上でバランスを崩すなど自殺行為だ。

「つてことは、難しい問題なんだな」

「……はい。そして、何も進歩してないんです。どうにかしようとは

思ってきたんです。でも……」

その先を口にできなかつた。

「情けないですよね……」

泣きそうになるのを堪えるのに、言葉を飲み込むのが精いっぱいだった。

「俺はそうは思わないな」

「……え？」

思わず顔を上げた。

青年は少しスピードを落として、初めてツカサに振り返った。澄んだ藍色の瞳と目が合った。

「悩んでいることの、何か悪いのかい？」

てつきり頷かれるか、言葉を濁して流されるかのどちらかだと思っていたツカサは、返答に迷った。

「いやだって……何年も悩んでて解決できなくて、上手くいかなかつて……情けなくないですか？」

「ハハハ、誰にだってあるよ、そんな悩み。俺だってそうさ」

青年は正面に向き直って、バイクの速度を更に遅くした。耳を騒がしくしていた風の音が小さくなる。

「俺もな、ずっとずっと悩んでいたことがあるんだ。どうにかしたいって、子供のころからずっと困ってて、解決したくって、足掻こうにも足掻けなくて……無力な自分を殴ってやりたかったよ」

同じだとツカサは思った。青年の悩みがなんなのかは分からないが、彼はツカサと似たような経験をしてきたらしい。

「そして最近……ほんと数日前にね、ようやく解決の糸口が見えてきたんだ」

「え、じゃあ……!」

「まだだ。まだ足りない」

ツカサから青年の顔は見えない。それでも容易に想像がついた。今青年は前方を睨んでいるのだろう。

「挑むだけの力とチャンスを手に入れただけだ。まだ入口に立ててすらいらない。まだだ……まだまだ俺には力が足りない……」

「力……」

「ああ、力だ。それでも俺は諦めない。成し遂げるんだ、必ず！」

青年の言葉ひとつひとつが、ツカサの頬を打ったように感じた。熱が背中から伝わる。掴んでいる体から沸き起こる。薄っぺらい人間には決して出すことのできないオーラのようなものを彼から感じた。「だからだ、少年。君も悩め。君は決して逃げてなどいない。それだけ悩んでいるってことは、大切な事だということだろう」

そうかもしれないとツカサは思った。

「君は大切なことについて向き合っている。闘っている！」

「……それが空振りでも？」

「ああ、もちろんさ。全力で空振りしてやれ。次当てれば良い」

「それも外したら……」

「また全力フルスイングだ。何度でも振るんだ」

「……はい」

青年が笑ったのをツカサは感じた。

「少し遅くなったかな。飛ばすぞ」

「はい！」

ツカサが青年のツカサにしがみつくと、バイクの速度が上がった。

この先でできることが何なのか、ツカサはまだ分からない。ただ、全力で向き合おう。それだけは心に決めた。

第6話。僕にできること

ロックマンはスカイウェーブを駆けていた。空港の電腦でヒカルとジェミニの狙いを知った彼らは、大急ぎでこの道を走っている。

雲の間を突き抜けていくと、見えてきた。一機の飛行機が飛んでいた。あれにツカサの両親が乗っている。そしてジェミニの攻撃はもう始まっていた。機体は右に傾いて上昇している。このままでは速度が落ち過ぎて失速の恐れすらある。

「なんてことを……」

両親のみならず、乗客乗員全てを巻き込むつもりだろう。

「よし、ぶっ飛ばしに行くぞー！」

「うん。ウェーブイン！」

電腦へと飛び込むと、飛行機の内部を思わせるデータ群が視界いっぱいになった。その中枢にジェミニ・スパークBがいた。

「ジェミニー！」

「待ちくたびれたぜ」

ジェミニはニヤニヤとした笑みを浮かべていた。これから戦うというのに、この余裕は何なのだろう。

「さあ、観念しやがれ！」

ウォーロックの意気込みに任せて左手を前に出した。ウォーロックの口にエネルギーを溜めて、ロックバスターをチャージしていく。「君じゃあ僕たちには勝てない。これで終わりだよ」

この状況、追い詰められたのはジェミニの方だ。だがなぜだろう。彼は微動だにしない。顔を曇らせるどころか、より一層口角を持ち上げた。

「良いのか、そのまま攻撃しても？」

「何言って……」

ようやくスバルは気づいた。

「ジェミニ、お前の後ろにあるのは……」

「ご名答」

ジェミニが一度逃げて、ここで待ち構えていた理由。簡単だ。人質

を取るためだ。

「この飛行機のメインプログラムだ。これに傷一つつけようもんなら……分かってるよな？」

ウォーロックも口に溜めていたエネルギーを霧散させた。

「てめえ、鼻からそのつもりで……」

「当たり前だろ」

メインプログラムが壊れれば、飛行機は上空1万メートルからまっさかまだ。そうなればロックマンでもどうにもできない。

「抵抗するなよ？」

ジェミニ・スパークBが歩み寄って来た。

「少しでも抵抗すれば、逃げようとすれば……」

こいつは何の躊躇もなくメインプログラムを壊す。ツカサの両親もろとも、この飛行機に乗っている人全員を殺す。そういうやつだ。だからロックマンは動けない。仁王立ちしてジェミニを睨むことしかできない。

「そうだ。それでいい。お前がここに来た時点で……いや、俺が来た時点で、お前は負けたんだよ」

スバルの顔が右に飛んだ。ジェミニの右拳が振るわれたのだ。

「おら、どうした？」

続いて左手。

「ええ、なんか言えよウォーロック!」

ウォーロックの顔が蹴飛ばされた。

「いや、お前にはこっちのほうが苦しいか？」

スバルの首を掴んで持ち上げた。呼吸ができない。苦しい。

「ああ、これだ。ずっとこうしてやりたかったんだ。俺の栄光を阻んだお前らを……そう、こんな風に……こんな風にだ!!」

ジェミニの拳が数発顔に入れられた。スバルの鼻から血が飛び散る。

「足りねえ。足りねえ足りねえ足りねえ!」

ジェミニの目は血走り、歯はむき出しにされていた。

「もつと、もつともつと……もつともつともつとだ! 苦しめ! 苦

しめウオーロック！」

拳と蹴りがスバルとウオーロックに振るわれる。2人は痛みにも悶えることしかできない。彼らの振る舞い一つで、多くの命が消されるのだ。

「まずはお前らを徹底して甚振る。その後につかさの両親とこの飛行機の地球人たちだ」

スバルの胸倉を掴んで起こしながら、ジェミニはニヤリと笑った。

「もしそうだったら……つかさはどう思うだろうな？ 両親を恨んだりしたから、関係の無い連中が沢山犠牲になったと、自分を責めるだろうな。傷つくだろうな。そして絶望する。……なあウオーロック、知っているか？ 脆くて簡単なんだぜ、そんな地球人を陥れるのはよ……」

「……てめえ、まさか……」

「ああ、そういうことだ」

ジェミニは勝ち誇ったように言った。

「つかさの心をボロボロにして乗っ取る。これで地球人の体が手に入る。つかさとヒカルの心も乗っ取れている……ようやく、俺の本当の力が出せるって訳だ」

「てめえまさか、前に戦った時は本気じゃなかったのか!?!」

ウオーロックのいう前とは、FM星人侵略の時のことだ。つかさとヒカルと電波変換した、白と黒のジェミニ・スパークと戦った時のことだ。

「そうだ。あの時は俺の力が二分されていた。つかさとヒカルの影響で体が二つに増えるというメリットはあったが、やはり力が半分になっっているってのは、大きな欠点だった」

「もし、てめえの言う『本当の力』ってものを出せるようになりや……」
「一つの体に俺の力が凝縮され、完全体になる。そうすれば、お前らなんざ敵じゃねえ」

上機嫌で答えていたジェミニはウオーロックの口を殴り飛ばした。

「まあ、お前らに見せられないのが残念だがな」

まずはロックマンを殺して、次に飛行機、そしてつかさという順番

だ。完全体のジェミニがロックマンと戦うことは無い。

「良いのか、俺たちより強いっていう証明ができねえぜ？」

赤く腫らした頬で、ウォーロックは無理に笑って見せた。再びウォーロックの顔が殴打される。

「調子にのるんじゃないやねえ！ お前が俺より強いだ？ そんなことはない。俺がお前らごときよりも弱いわけがねえだろうが！」

今度はスバルの顔が蹴られた。

「地球人の体を手に入れるのに手間取っただけだ。体を二つに分けちまうのが失策だったただけだ。今度こそ、俺は完全体となって、地球を手に入れ、軍を組織し……FM星を奪いに行く！」

これは聞き捨てできなかつた。スバルの大切な人たちが傷つけられる。加えてFM星には友人たちがいるのだ。

「させないよ、そんなこと！ ケフェウスと三賢者にだって……」

「てめえ立場分かってんのか!？」

スバルの腹が蹴り上げられた。思わず苦悶の声を漏らしてしまう。

「次、生意気な口をきいてみる。飛行機を落とすぞ」

これを言われると、スバルもウォーロックも黙るしかない。

「そうだ、それで良い」

血の味を噛みしめるスバルをもう一度起こす。

「お前らを殺すのも、ツカサを手に入れるのも、時間の問題だ。もうしばらく楽しませてもらうぜ」

スバルの鳩尾に拳が突き立った。悶絶する彼を蹴り上げる。スバルとウォーロックの長い時間が始まった。

◇

「ここで良いのかい、少年？」

「はい、ここで」

ツカサを乗せたバイクはドリームアイランドの入口で止まった。側にはバス停、目の前には島に続く橋。以前、スバルとここに来た時はバスだったなど、少しだけ思い出に耽った。

「本当にありがとうございました」

「なに、困っている人を助けるのがヒーローさ」

青年はキレのある動きでビシッと腕を伸ばした。何かのヒーローの真似だろう。

「さあ、行くといい。ここですることがあるんだろう?」

「はい。じゃあ行きます」

「うん、機会があればまた会おうツカサくん」

青年はバイクを走らせてあつという間に去ってしまった。

「よし、行こう」

橋に向かって歩き出す。

「……あれ?」

なんだろう、何か引つかる。だが気にしないことにした。今はするべきことがあるのだから。

ツカサは橋を渡って、ドリームアイランドへと足を踏み入れた。右側には公園の入り口があった。その奥には花畑があつて、更に奥には小さな草原がある。ツカサが一番好きな場所。雑草と名前も知らない花が咲き乱れる憩いの場所。スバルとブラザーバンドを結ぼうと約束して、それを裏切つて戦つた場所。

だがそれでもスバルは言ってくれたのだ。またブラザーになろうと。こんな自分に言ってくれたのだ。

足先を戻して、ツカサはまた歩き出した。

ゴミ処理場の受付には制服に身を包んだ強面の警備員さんがおり、顔を見せると「久しぶりだね」と笑顔で顔パスさせてくれた。

中に入って、知り尽くした道を進む。そして足を止めた。目の前にはゴミの集積所。まだ赤ん坊だった自分が捨てられていた場所だ。

ツカサは胸を抑えた。自分の身の上を知ってから、何度かここを訪れた。その度に苦しくなる。ならば来なければいい話なのに、それでも足を運んでしまった。なぜだろう。帰巢本能というものなのだろうか。

「きつと、ここに……」

スバルは言った。逃げているだけだと。

「僕は……何に気づいているんだろう?」

ジェミニは言った。ヒカルについて何も理解していないと。自分

がヒカルに対して酷い事をしていると。

「……大切なことのはずだ」

あのバイクの青年は言った。大切なことだからこそ悩んでいるのだと。

「……なんなんだ……」

ヒカルについて何を理解していないのだろう。気づいているのに、逃げているのだとしたら、あと一步……あと一步で理解できるはずだ。大切な何かがここにあるはずだ。

ツカサはゴミの中に一步足を踏み入れた。土は何かか混ざったような液体で湿っていた。酷い汚臭がする。染みこんだこの靴はもう履けないだろう。構わずにツカサはゴミの山に手を触れた。

「……ここにあるはずなんだ……」

分からない。分からない。スバルは分かっているのに、分からない。そんな自分が悔しくて、思わず項垂れる。足元にバケツがあった。底に穴が空いていて、泥だらけで汚い。何を思ったのか、それを手に取った。

一瞬躊躇した。だが菌を食いしばった。ゴミを掴んで中に入れる。それを頭からかぶった。汚水が混じっている。臭い。瞼を流れる。口に入りそうになった。二度、三度と繰り返す。

「同じように……同じように……」

あの時と同じ。捨てられたときと同じように。ゴミに埋もれた赤ん坊のころに自分を近づける。

口に少し入ってしまった。吐き気がする。口元を抑えたが、その手も汚物まみれだ。自分の姿を見てみる。服は黒っぽい茶色になっていて、形容できないほど気持ち悪い。

「あの時の僕も……こんな姿だったのかな……」

汚い布一枚にくるまれていたと保母さんから聞いた。雨の日に、長い時間置き去りにされていたらしいとも。きっと今よりも酷い有様だったのだろう。目に入ってしまったのとは別の意味で、涙が出てくる。

「よく、そんなことができたよね……」

あの両親はなぜこんなことができたのだろう。止むに止まれぬ理由があつたのかもしれない。それでもなぜ手放したのだ。手放すにしても、なぜこんな場所を選んだのだ。

なんでそんな両親の間に生まれてしまったのだろう。もつとしつかりした両親の間に産まれたかつた。世間を見渡せば見渡すほど惨めになる。誰にも当たり前に両親がいて、愛情を貰っている。スバルやルナたちも、クラスの皆も……今まで出会ってきた子供たちには皆親がいた。そう、親がいないということを経由に虐めてきた奴らにだって、両親がいた。皆、両親から愛されていた。

「……なんで……なんで僕が……」

子供を育てる両親の方が圧倒的に多い。なのになぜ、なぜ自分だったのだろうか。なんで……。

「なんで……僕を愛してくれなかつたんだ……それなら、産まなければ良かったじゃないか……」

涙がボトボトと出てきた。苦しい。ただひたすらに苦しい。両手で二の腕を掴んだ。

「……………あれ？」

そしてふつと気づいた。自分の異様さにだ。

「……なんで、僕……怒ってないんだろう？」

辛くて悲しい。その感情はある。だがなぜだろう。怒りが無い。

「普通は怒る……はずだよね」

さらに言うなら憎しみもない。今のツカサは、ただただ悲しいという現実を見ているだけに過ぎない。

「……変だよね……なんで僕は……」

普通なら怒りのあまりに……。

「……………あ」

そしてようやく理解した。

「そっか、そういうことだったんだ」

手をだらりと下げた。ゴミの山を見上げる。もたれかかるように頭をつけて、一度だけ拳で叩いた。

「僕は……なんて卑怯者なんだろう……」

第7話・僕のヒーロー

どれくらいその姿勢でいただける。ツカサはゴミの山に預けていた体を起こすと、スターキヤリアーを取り出した。

「ジェミニ、スバルくんは電話をして」

スターキヤリアーの中にいる白いジェミニが、ブラウザ画面を開いてスバルに連絡を入れた。数回のコールの後に、ブラウザ画面にロックマンが映った。倒れていた。体中怪我だらけだ。そんな彼を踏みつけているジェミニ・スパークBの姿があった。

「ハハハ、どうしたよツカサ……なんだその格好？ まあいいか。それよりなんで電話をかけてきた。ロックマンが痛めつけられているところを特等席で見たくなかったのか？」

そんなわけないだろう。スバルに電話をしたのは、ジェミニを見つけたら話をさせてほしいとお願いするためだ。

「今俺たちはどこにいると思う？ お前の両親が乗った飛行機の電脳だ。人質をとったら、ロックマンのやつ子犬みてえに大人しくなつてな。甚振るのにも飽きて……」

「どうでもいい」

自分でも驚くほど座った声だった。満面の笑みだったジェミニは、水を差されたような顔になった。

「なんだと？」

「どうでもいいと言った」

「て、てめえ分かってんのか！」

ジェミニが画面に近付いてくる。乱暴に手を伸ばしたかと思うと、景色が横に動いた。ブラウザ画面を掴んで動かしたのでだろう。

「あれが見えるだろ。この飛行機の電脳だ！ あれを少しでも傷つけたらこの飛行機は墜落する。お前の両親も、関係のない地球人もだ」

また画面を動かした。倒れているロックマンが映る。

「俺の機嫌を少しでも損ねてみる。この飛行機なんざ木っ端みじんに……」

「好きにすればいい」

言葉を失うジェミニの目を、ツカサは真つすぐに見た。

「な、何言ってるのか分かってんのか！ お前、死ぬんだぞ。てめえのせいで……」

「ああ、そうだよ。僕が弱かったからこんなことになった。結果は受け止める」

「は……？」

「それと、もしそうしたら追い詰められるのは君だよ。人質がいなくなったら……」

ツカサは倒れているロックマンを見た。スバルとウオーロックと目が合う。2人の力強い瞳に頷いた。

歯を食いしばり、口をへの字にしているジェミニ。そんな奴、もうツカサの眼中には無かった。

「ヒカル、聞こえるかい？」

当然返事は無い。聞こえていないかもしれない。それでも今できることはこれだけだ。

「ごめん」

頭を下げた。顔に着いたゴミが少しだけ足元に落ちた。

「僕が悪かったよ。僕は君に酷い事を言った。卑怯者だったよ」

ジェミニが後ずさりをした。謝罪している地球人を前にしてだ。

「ヒカル、やっと気づいたんだ。君が……君が僕を守ってくれていたことに」

考えれば簡単なことだった。

「僕は、両親が憎かったんだ。両親がゴミ捨て場に僕を捨てたって聞いて……なんで愛してくれなかったんだって……憎くって、憎くって……自分が壊れてしまいうるほどに……」

覚えている。ヒカルが生まれたときのこと。あの時のツカサは憎しみのあまりに、頭が割れそうほどの痛みを伴っていた。

「だから、君が守ってくれたんだ。僕の代わりに憎しみを抱いてくれたから」

きつとそれは生存本能だったのだろう。ヒカルを産みだすことで、ツカサは心綺麗にいられたのだから。

ジェミニに変化が起きたのはその時だった。ビクリと左手が動く。慌てて右手で押さえつけた。

「な、なんだよおい……」

そう言っている彼が一番分かっているのだろう。ウォーロックが代わりに説明した。

「ヒカルが反応しているみてえだな。ツカサ、お前の言葉は確かに届いてるみてえだぜ」

笑いかけてくる彼に微笑み返す。

「ヒカル……今まで、君を嫌っていてごめん。君こそが僕を救って、守ってくれていたヒーローだったのに……」

ツカサを虐める連中は、皆ヒカルが殴ってくれた。道徳的に見れば良い事ではないだろう。それでもツカサを救う行為だった。ツカサは自分のしたことではないと目を背け、傍観して殴られた人たちを哀れんでいた。そんなお優しい自分が可愛かったのだ。これを卑怯者と言わず何というのだろう。

「でも、もう大丈夫だから」

ジェミニの左腕がだんだんと持ち上がっていく。ジェミニが何かを必死に喚いているようだが、ツカサには聞こえていなかった。

「ヒカル……両親への復讐も、もうやらなくていい。僕は背負っていくから」

ツカサは左手を前に出した。

「だから……戻ってきてくれ」

ジェミニの左手が完全に持ち上がった。ブラウザ画面に映っているツカサへと伸びていく。

「ヒカル、僕と生きてくれ！」

◇ 2人の手がブラウザ画面越しに触れあった。

ツカサは黒い世界に進み出た。目の前にはヒカルが座っていた。いや、黄色い電流のロープで全身を縛られていた。

「ヒカル！ これ、ジェミニの仕業だね……」

歩み寄って、ヒカルの顔を窺う。目は虚ろでなにも見てはいな

い。だが左手だけは前に伸ばしている。その手に触れる。
「ごめん。君をこんな風にしてしまつて……」

ロープに手を伸ばした。電流が激痛となつて走る。構わずに強く握つて力任せに引きちぎつた。その手に剣が突き刺さる。

「止めろー！」

黄色い電気の塊のような体に、黒い仮面……ジエミニだ。エレキソードでツカサの手を切りつけたのだ。

「させるかよ。ツカサ、お前も思い直せ。このまま俺に力と体を任せ
るんだ」

痛みもジエミニも無視して、ロープをちぎつていく。

「楽になれるぞー！ もう何も考えなくていい、悩むことも悲しむこと
もねえ。お前らの怒りにままだ俺が暴れてやるー！」

ツカサの手は止まらない。こうしている間に、ヒカルの拘束が解け
ていく。

「止めろ……止めろー！ 止めろー！！！」

ツカサの腕が一刀両断される。だが切り離されることなく繋がり、
何事も無かつたかのように作業を続ける。

「ふざけんなー！ あと少しだったんだ！ あと少しで、俺はロックマ
ンを倒し、体を手に入れて、完全体になつて、地球とFM星の王にな
るはずだったんだ！ それが、お前に……お前なんかに！！！」

ジエミニががむしゃらに剣を振ってくる。ツカサの首が斬られ、胴
を割かれ、頭のとっぺんから二つに斬られ、細切りにまでされた。そ
れでもツカサは止まらない。

「なんでだ！ なんでだ！！！」

今度はジエミニが現実から目を逸らす番だった。ここは精神の世
界。どれだけの言葉が立ちはだかろうとも、どれだけの暴力が襲いか
かろうとも、それは何の障害にもなりはしない。

今のツカサを阻めるものは、何も無いのだ。

「止めろー！ 俺は……俺は！！！」

ジエミニが剣を振るつたのは何度目だろう。ツカサの顔の側を硬
い物が通過した。ヒカルの拳だった。それはツカサの後ろにいた

ジエミニの仮面を砕き、体を消し飛ばした。

「……ヒカル」

消えていくジエミニに目を向けることもなく、ツカサはヒカルを抱き起した。だが無理そうだ。ヒカルは膝から崩れてツカサにもたれかかった。

「ヒカル……」

「……悪い、動けねえや」

ヒカルの呼吸が荒い。ジエミニに拘束されている間に精神力のほとんども削られたらしい。

「本当に……ごめん」

「かまわねえよ。それが俺が生まれた理由なんだからな」

「……うん。君なんていらなんて言っつて、ごめん」

「……ああ。そっちもあつたか」

ヒカルはへツと笑って見せた。だがもう目は開いていない。ツカサはその頬に触れる。

「ヒカル、一つに戻ろう」

ヒカルは少しだけ目を開いた。

「良いのか？ 俺を受け入れると、今までのお前ではいらなくなるぞ」

「さっきの僕を見ただろう。僕はもう、そんなことを恐れたりなんかしない」

「……そうだな」

ヒカルが笑みを浮かべた。とても寂しそうに。

「俺なんていなくても、お前はやっていけそうだな」

「違うよー」

今までに聞いたことのないツカサの大声。ヒカルは閉じかけていた目を丸く見開いた。

「ヒカル、君は僕と一つになるんだ。僕と一緒に、ずっと生きていくんだ」

「だって……」というツカサの目に、涙が浮かんだ。

「君は僕なんだから……」

そしてやっと、やっとヒカルが笑った。柔らかくて暖かくて、少年のような物だった。

「ああ……」

ツカサが左手をかざす。ヒカルの左手がゆつくりと持ち上がり、触れる。

◇ ヒカルの左目から一筋の涙が流れた。

「ツカサくん！」

声に気づいてゆつくりと目を開ける。

「……スバル……くん」

ツカサが力なく口を開いた。

「……ここは……」

「ゴミ捨て場だよ」

ああ、そうか。何を言っているのだろう。

「スバルくん、汚いよ？」

「構わないよ」

汚物まみれのツカサを抱えてしまったせいで、スバルの服も汚れていた。申し訳なく思っただち上がろうとする。

「あ……」

力が入らずに転んでしまった。ゴミの中に埋もれてしまう。

「大丈夫？」

スバルが手をさしだした。手を伸ばそうとして、やめた。

「ありがとう。でもいいよ。一人で立てるから」

ツカサは足を確かめた。ズボンも靴も汚水を吸って重くなっている。その足で地面を踏んだ。何か細長い物がある。構わずにゴミを押して上半身を起こす。ここまできたらもう簡単だ。腰を据えて、体を起こして、二本の足で立ち上がった。

「転んでも、また立ち上がればいい。そうでしょ？」

「もちろん」

頷きあうと、ツカサは歩き出した。

「まだ、終わってない。行くところがある……ついてきてくれるかな」

？」

「良いよ。一緒に行こう」

スバルと頷きあつて、ツカサは歩き出した。そして気づいたように、左目の涙をぬぐった。

最終話 僕と君と

あの日から数日経った。TK空港のトラブルに、飛行機の異常。一日に大きな事件が2つも起きたことで世間は少々沸いたが、それもあつという間に忘れ去られた。

ツカサは窓の外を見ていた。アナウンスの声が次の駅の名を呼ぶ。ゆっくりと減速して、電車が止まった。乗ってくる人たちを意味も無く眺めて、また窓の外を見た。

「ゴダマタウンからどれくらい離れたのかな？」

その声に応える者はいない。聞いている者もない。今の彼は一人なのだから。

いや一人だけ反応した者がいた。携帯端末からブラウザ画面が開かれた。そこには現在地からゴダマタウンまでの距離が書かれており、画面の下のほうでは灰色の仮面をつけたジェミニが無邪気に飛び回っていた。

「ありがとう、ジェミニ。でもね、答えて欲しかったわけではないから、こんなことしなくてもいいんだよ？」

画面に映った灰色のジェミニを、指先で撫でるように触れてあげる。嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ねた。伝わっているのかなとツカサは苦笑した。

「今ごろ、皆はどうしているかな」

スバルたちと次に会えるのはいつだろう。住む場所が変わるのだ。今まで通り会いに行けるなどと言うことは無いだろう。

ツカサはあの日のことを思い出した。あの後、スバルと共に両親に会いに行った。あの姿のままだ。頭からゴミを被ったままのツカサを見て、生まれて初めて会った両親は驚いた顔をした。立会人になった保母さんや、役所の偉そうな人もだ。

構わずツカサは両親の前に座った。見せつけるようにだ。それがツカサの答えだった。その後のことはよく覚えていない。体から沸き起こる熱に任せて両親を罵倒した事は覚えている。あれが怒りという感情なのだろう。自分でも驚くほど口が悪くなったと思う。

だがこれがツカサなのだ。ヒカルという側面を受け入れた、本来の自分なのだ。

「これで良いんだ」

それでもツカサは今の自分が好きだった。あれから感情の幅が広がった気がする。今までは無感情だったり、関心が持てなかったことが多々あったのだが、今は違う。電車が再び走り出して、窓の外の景色が後ろへと流れていく。それを眺めているだけでも少し楽しい。

今なら分かる。ヒカルの正体は憎しみなどではない。自分に最も欠けていて。この世で最も美しい感情……愛だったのだと。

「……強くなるんだ」

感情の幅が広がったということは、揺れ動きも激しくなったということだ。今まで感じたことのない感覚に戸惑うことも多い。それでもこれが自分と向き合うということ、ヒカルと生きていくということだ。楽しむことはあっても、恐れることは何も無い。

「スバルくん、僕は強くなる。そして、いつか君にブラザーバンドを申し込む」

ポケットから赤い花を取り出した。以前、スバルが摘んできてくれた花だ。今のツカサはようやくまともな人になれただけだ。もっと強く、胸を張れる人になって、スバルに会いに行く。

「だから、もう少しだけ待っていてくれ」

そして胸に手を当てた。

「君も力を貸してくれ、ヒカル」

目を閉じた。

「悩みは解決したかい？」

「え!？」

横から声をかけられて、ツカサは肩を飛び上がらせた。そこに立っていたのは一人の青年だった。

「バイクのお兄さん!？」

「やあ、また会ったな」

笑いながら青年は隣の席に腰かけた。

「いるかい？」

そして胸のポケットからうまい棒を取り出した。流れるようにだ。
「い、いただきます……」

胸ポケットにうまい棒を携帯する人を初めて見た。

「はまっちゃったんですか?」

「ああ、もう手放せなくなってますね」

手品の如く高速で封を開けると、青年はサクサクサクと軽快な音を立てて食べていく。とても幸せそうな顔だった。残念なイケメンって、この人のためにある言葉だなと、失礼なことを思ってしまった。

ツカサも封を開けて口にする。

「そうだ、ここで会ったのも何かの縁だ。次の駅で降りないかい?」

「え、次の駅ですか?」

断ろうかと考えたが、バイクで送ってもらえたことを考えると無理な話だった。

◇

降りた駅は小さいもので、近くには自然公園があった。小川が流れていて、面して木造りの椅子と机が並んでいる。のんびりと散歩するには最適のスポットだろう。

「良いところだろう?」

「ええ、そうですね」

話を合わせるためではなく、心から同意した。川のせせらぎと虫の鳴き声の合唱など、ずっと聞いていたいと思える。

「ハハハ、良い顔をするようになったね、ツカサくん」

「はい、おかげさまで……」

ハツと声を失った。今になってようやく気付いた。あの時の違和感の正体に。

「なんで僕の名前を知っているんですか!？」

ツカサは名乗ってなどいない。

「やっと気づいたかい?」

青年は毒気のない顔と声で答えた。どうやらからかっていただけらしい。それが反って不気味だった。

半歩後ろに足を引いた。後ろに下げた手で、携帯端末を握りしめ

た。

「……何者なんですか、あなたは？」

「ハハハ、そう身構えなくって良い。俺はこういう者だ」

青年は携帯端末を取り出すと、ブラウズ画面を開いた。映し出されたのは顔写真や肩書が書かれた名刺ではなく、マークだった。

大ききの違う三つの円があり、それぞれの頂点が重なっている。一点から大中小の円が描かれている常態だ。一番小さな円の中には、十字を思わせる星のような絵がある。

彼の自己紹介はそれで充分だった。なぜなら、このマークはとてつもなく有名で、ツカサも当然よく知っている物だったからだ。

「サテラ……ポリス？」

「そう、俺は警官なんだ」

青年はブラウズ画面を閉じると、警戒しないでと両手を振った。無理な話だ。先日の事件に深くかかわっていたツカサにとっては。携帯端末を持った手に汗が滴った。

「……サテラポリスが僕に何のようなんですか？」

「そうだな、ここまで来たんだ。単刀直入に言おう。俺たちの庇護下に入って欲しい」

予想していなかった言葉が出てきた。ツカサは額に皺を作った。

「庇護下……？」

「そうだ」

「……えっと」

「おっと君が言おうとしていることは察している。なぜそんな話を？
だろう。分かるとも」

勝手に話が進んでいく。青年は人差し指を立てて、にこやかに言った。

「君の中のジエミニを監視するためだ」

ぞくりと悪寒が走った。ツカサが「……え？」と言うまでの数秒間、青年はニッコリとした笑みを一切崩さなかった。

「な、なんで……」

言葉にしたが、すぐに理解した。

「空港で僕をバイクに乗せてくれたのは！」

青年は頷いた。あの時からずっと目をつけられていたのか。

「僕とジェミニのことは……」

「それどころかヒカルくんのことも知っているよ。君と一つになったこともね」

これがサテラポリスの情報網なのだろうか。ツカサのことは全て把握していると見て良いだろう。

ツカサは携帯端末から手を放した。これは逆らっても、逃げてでも無駄だろう。

「ツカサくん、ジェミニは今も君の中で眠っている」

青年の顔が真剣な物に変わった。ツカサが初めて見る物だった。

「今までは君の人格が二つになっていたこともあって、ジェミニは本来の力を出せずにいた。だが、次は違う」

何を言いたいのか理解した。なぜ言われるまで気づかなかったのだろう。

ツカサはヒカルを取り戻したことで、感情の揺れ幅が大きくなった。それは制御が難しくなったと言うことでもあり、孤独や怒りに捕らわれる危険性が増した事を意味する。ツカサの中にいるジェミニはその隙を逃さないだろう。

ツカサの感情一つで雷神ジェミニは復活するのだ。それも今までとは違う、完全体として。

「取り繕わずに言わせてもらう。君は危険人物だ。よって、サテラポリスの庇護下……および監視下に置かせてもらう」

「そんな勝手な事。横暴ですよ！」

やっと前に進めたのだ。なのに監視下におかれるなど、まっぴらごめんだった。

「ジェミニの危険性は、君が最も理解しているだろう？」

青年の言葉は正論過ぎた。サテラポリスよりも、スバルよりも、この地球の誰よりも、ツカサが一番よく知っている。

なにも言えなくなってしまったツカサに、青年は少しだけ態度を柔らかくした。

「庇護下と言っても、刑務所に入れるわけじゃない。君には予定通り、孤児院に行つて学校に通つてもらおう」

「……え？」

驚くほど緩い態勢だった。

「いや、さつき……僕を危険人物つて……」

「ああ、だがすぐにジェミニを復活させてしまうという事は無いだろう。君はヒカルと一つになって、ジェミニを封じ込めたのだから」
サテラポリスはどこまで知っているのだろう。だがツカサを信頼してくれているらしい。

「むしろ監禁なんてしたら、君はストレスですぐにでもジェミニを復活させてしまいかねない。そんな真似、俺たちサテラポリスもできればしたくない」

「いや、助かるけれど良いのかな？」とツカサは内心思った。とりあえずこの青年は自分の敵ではないのだと思うことができた。

「……庇護下に入ると、どうなるんですか？」

「ちよつと待つてくれよ」

青年は携帯端末からブラウズ画面を開いた。書類を見ているらしい。

「まず、週に一度サテラポリスの地方支部に通つてもらおう。そこで君には電波変換の練習をしてもらつたり、戦闘訓練を受けてもらつたり、機器で体を調べたり、カウンセリングを受けてもらつたり……と、色々だな。ようは、君がジェミニに屈しない、強い人になってもらいたいってところだ」

ツカサは全身から力が抜けるのを感じた。なんだ、大げさな言い方をする人だ。庇護や監視と言うよりは、サポートではないか。それならツカサも問題は無かった。成長の機会を貰えるなら、むしろありがたいくらいだ。

「分かりま……ちよつと待つて下さい」

慌てて返事を止めた。さつきの青年の言葉を思い出せ。一つ引つかかる項目があった。

「戦闘訓練つて、どういふことですか？」

「うん、ちゃんと気づいてくれたか」

「試したんですか？」

「そうだよ」

ムツとするツカサに臆することなく、青年は告げた。重い声でだ。
「ツカサくん、近いうちに事件が起きる」

「……事件？」

「ああ、FM星の侵略や、ムー大陸の復活と同じか、それ以上のだ」
今何と言った。話が突拍子過ぎる。

「ちよ、待ってください。話が飛び過ぎていませんか？」

「飛ばしたつもりはないし、当然ふざけてるつもりもない」

青年の目を見てツカサは察した。冗談を言っているものではない。

「そのために、今は戦力を集めている。君もそれに加わって欲しい」

「……僕は危険人物ですよ？」

「言っただろ。君を強くすると」

「……毒を以て毒を制するってやつですか？」

「そう思ってくれていい」

ツカサは大きく深呼吸をして気を落ち着かせた。ようやくサテラ
ポリスの狙いを聞き出せた。

「この戦い、スバルくんも参加するんですね？」

「近日中にスカウトするつもりだ」

これを聞ければ、もう悩む理由は無かった。

成長して強くなれば、スバルと共に戦えるかもしれない。望むところだ。

「分かりました。お願いします」

「良かった。君ならそう言ってくれると思っていた。ありがとう、双
葉ツカサくん。よろしく頼むー！」

青年は大股で近づいて、握手を求めてきた。

少しためらってから応えた。口を開こうとして……あつと気づいた。

「そう言えば。お名前は何ですか？」

「おっと、俺としたことが。まだ名乗ってなかったな。そうだな……」

青年は斜め上を見上げると、子供のような笑顔を見せた。

「ヒーロー……さ」

「好きですね、それ」

冗談なのかよく分からない名乗りに、ツカサは苦笑いを浮かべた。

お　し　ま　い　　？